

出 会 い



チェンバロ奏者
三橋 桜子 氏

とうとう私の夢が叶うことになりました。生まれ故郷である岡崎で、コンサートをさせていただくことになったのです。この地には、三島小・竜海中時代の懐かしい思い出がいっぱい詰まっています。岡崎を離れて十三年が経ちましたが、そこでお世話になった人たちや友達の顔が今でも浮かんできます。

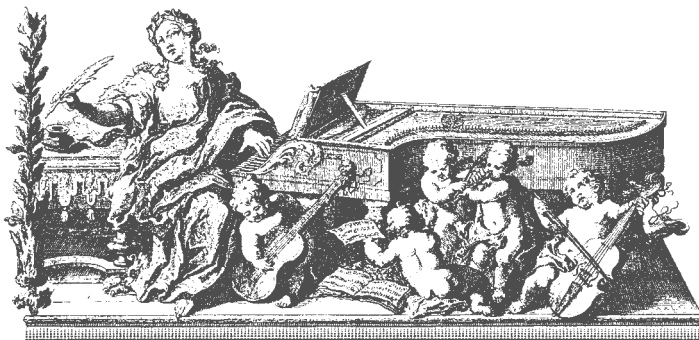
音楽の世界に初めて触れたのは、五歳の時、姉たちが習っていたピアノの先生との出会いでした。竜海中の吹奏楽部では合奏を通して、皆と一緒に音楽を創りあげる喜びを覚えました。その後、私の人生の大切な一部である「チェンバロ」と出会い、古い歴史を持つ繊細で優雅な楽器の音色に魅了されました。ここまで続けてこられたのは、家族や先生、友達など周りの人たちの支えがあったからだ、いつも強く感じています。どんな分野でも、ひとつの事をす

つと続けていくのは難しい事なのかも知れませんが、一番大切なのは、本人のやる気はもちろんですが、それを支える環境だと思っております。周りの人たちからいただいた言葉や助言がどんなに私の力になっていくか、計り知れません。音楽家の場合、先生との出会いが最も重要で、音楽的にも人間的にも影響を受けました。目標を目指すエネルギーを作るきっかけを与えてくださった先生方にとっても感謝しています。

私が現在住んでいるオランダでも、色々な国の人との出会いがありました。それらはずっと私の宝物になることでしょう。これからも出会いとご縁を大切にしていきたいと思っています。

(みつはし さくらこ)

追記 コンサートは十二月六日(金)午後七時よりコロナネットホールで開催予定です。



教育随想



平成14年11月1日

11月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
チェンバロ奏者	
三橋 桜子氏	
この人に聞く	2
酪農家	
山本 勝正氏	
羅針盤	2
特別活動指導員	
内藤 隆之	
ふれあい	3
奥殿小	
飯尾 容子	
高浜市立翼小	
戸澤 剛	
特集	4
家庭・地域に開かれた学校	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
人形送別会(昭和2年)	
この本を	8

・岡崎市出身 東京芸術大学卒
・オランダのユトレヒト音楽院で学び、現在ヨーロッパでも活躍中

ふるさとシリーズ この人に聞く



家族と共にある酪農生活

酪農家

山本 勝正 氏

伊賀川をさかのぼり、北の方へ山をしばらく入ったところに二ヘクターほどの山本さんの牧場がある。この地方では、北海道などから成長した牛を導入するのが一般的である。しかし、ここにいる一四〇頭ほどの乳牛は、全てこの牧場で生まれて育てられた。このような一貫経営は都市近郊型酪農にあつては珍しい。山本さんの牧場の牛乳は、子供たちが給食で飲む牛乳になる。その量は、一日一八〇〇リットル、給食の

牛乳九千本分だ。

「人の口に入るものですからね。気を遣いますよ。だから、えさは必ず自分のところで配合します。搾乳前のチェックも欠かしません。知らなかったではすまないの、牛にかかわる者は、牛の様子について連絡をきちんと取り合います。夫婦げんかもできませんよ。」

二十年間二人三脚でこの仕事をやってきた奥さんと顔を見合わせ、大きな声で笑った。

今、世間では様々な問題が取りざたされ、酪農家にとって、決して楽な時代ではない。廃乳牛の値段が、それまでの百分の一になったこともある。酪農家の数は年間五パーセントずつ減っている。朝四時半に起きて仕事をするのも、特に冬はつらい。それでも山本さんはこの仕事が大好きだという。



「牛の世話をすること、それ自体が楽しいんです。自分の考えで、自分のペースで仕事ができるのもおもしろい。この仕事で得られる満足感や充足感は、何ものにも代え難いものです。それに、この仕事なら、朝

も夜も家族みんなで食事ができる。子供を学校に送り出すこともできる。この辺りは緑が多くて季節感がある。子育てにもいいところですよ。なんととっても家族の生活がベースです。」

壁に掛かった家族写真の三人のお子さんの笑顔が、山本さんの信念を物語っている。

「将来は今より頭数を減らして、もっと牛にかかわりたい。いい牛乳を作って、生産者の顔が見える仕事が見たい。酪農生活を楽してみたいです。酪農家なら、だれでも夢に見ますよ。」

牛舎に入ると、牛たちが一斉に山本さんを見る。すぐに安心したようにえさを食べ始めた。牛たちに向けて山本さんのまなざしは、優しく温かかった。

氏名 やまもと かつまさ
生年月日 昭和三十一年七月二十六日
住所 田口町一色三

羅針盤

学級の諸問題に

立ち向かう学級活動

特別活動指導員

内藤 隆之

ビデオでトイレの清掃や清掃後の反省会の様子が放映される。そこには、日常の清掃活動でよくある問題点が映し出されていた。画面に映る男の子たちのコミカルな演技に声をあげて笑いながらも、真剣にテレビ画面を見つめる子供たち。A小学校六年生の学級活動「見直そう！ぼくわたしの清掃活動」の一場面である。若いB先生は、「清掃活動の見直し」という古くて新しい主題に果敢に取り組んだ。そこで、問題を子供たちに共有化させるため自作のビデオを使った。ビデオを視聴した後の話し合いでは、「掃除に遅れてきたのに、先に終わるのはずい」「理由もないのに遅れてくるのはおかしい」「じゃまをするのなら帰れ」と男の子の行動を非難する発言が続く。

室町文化を「聞く」

奥殿小 飯尾 容子

「先生、聞香で当たったよ。」

A男が、大きな声で報告にきた。大人でも当てるのが難しい「聞香」で、男子でたった一人当てたのだ。

「聞香」とは、香をたいてその種類を当てる室町時代のゲームのこと。今まで歴史への関心が少ないA男に、心に残る体験をさせようと、志野流の四人の先生を招いた。

待ちに待って迎えた当日。体育館に準備した畳の上に、A男が神妙な顔をして座る。香道の歴史や楽しみ方の説明を受けたあと、A男は鼻を近づける。

「臭いを聞くというように、そおととかいでみてね。」

ますます神妙な顔をして、首を傾ける。そして、みごと三種の香を当



てた。

「すごい。やったね。」

と声をかけると、A男は、みるみるうれしそうな笑顔となった。

「緊張したけど楽しかった。臭いを聞くということを初めて知った。香で遊ぶことが室町時代から続いていたなんて驚いた。他の人にも香道のことを教えて、一緒に楽しみたい。」とA男は盛りだくさんの感想を書いた。

この歴史の面白さに触れさせる体験が、A男の歴史学習への興味を、一気に高めたようである。



A男の想い

高浜市立翼小 戸澤 剛

「先生、A男が怒ってどっかへ行っちゃった。」

グループに分かれてのスタンツ練習中に、ちょっとした誤解からA男が爆発してしまっただけ。

A男は低学年のころから友達と上手に接することができず、いつの間にか、独りでいいやと、心を閉ざしてしまっているようなところがある子だ。A男の態度を見てみると、ト



ラブルになるのも仕方がないと思わされることもあった。

何と言ってなだめようかと思いつきながらA男を探していると、二階の図書室前を興奮した様子で歩いている彼を見つけた。事情をゆっくり聞いていくうちにだんだんとA男の感情の高ぶりが収まってくるのが分かった。

「本当は、ぼく、みんなと仲良くしたかったんだよ。」

小声だったが、彼の強い思いが伝わってきた。この気持ちがあれば、これからもトラブルはあるだろうが、いつかきつと自分の力で友達とのよい関係をつくっていきけるだろう。「大丈夫だよ。」

それだけ言って、背中をポンと軽くたたいてやると、彼の目から涙がこぼれそうになるのが見えた。わたしに向かって大きくうなずくと、A男がグループのほうへと力強く歩き出した。

そこで、B先生は、「遅れてきた子の気持ちはどうなんだろう」と切り返した。すると、「別に遅れたっていいじゃん」「掃除なんか早く終わらせて思っている」「早く遊びに行きたい」と子供たちの本音の部分が見え始めた。

具体的な解決策を話し合う前に時間切れになってしまい残念であったが、自作ビデオの男の子たちの姿を借りることで、高学年の子供たちには言いにくい本音を引き出すことに成功した授業であった。

学級活動は、子供が実際に生活を営む場を舞台にする。そこで生じる問題を自らの問題として受け止め、お互いに知恵を出し合って解決しようとするものである。しかし、最近学級の問題に子供たちが真正面から取り組む授業を参観することが少なくなってきた。若いB先生が問題解決の話し合いに取り組めたことはたいへん心強い。

「授業後の清掃では、意見を言わなかった女の子がいつもより一生懸命に廊下を掃除してくれたんですよ」と言う先生の笑顔が印象的であった。B先生の学級は、きつと、諸問題を自らの力で解決する力強い学級として歩み始めることだろう。

家庭・地域に開かれた学校

どう手を結ぼうとしているか



お母さんが講師の保健授業（広幡小）

新指導要領実施から半年、市内の小中学校では、家庭や地域に開かれた学校づくりを目指し、様々な取組が見られる。お互いの交流を通して、教育活動の幅を広げ、学校の活性化を図ることがねらいである。

家庭や地域に学校の取組を広く理解してもらうため、学年や学校便り、回覧板等をこまめに発信している。ホームページを毎日更新している学校もある。特に、本年度の授業公開では、公開日を増やす工夫がみられる。懇談会や学校評議員会なども定期的に開き、学校評価に役立てようとしている。

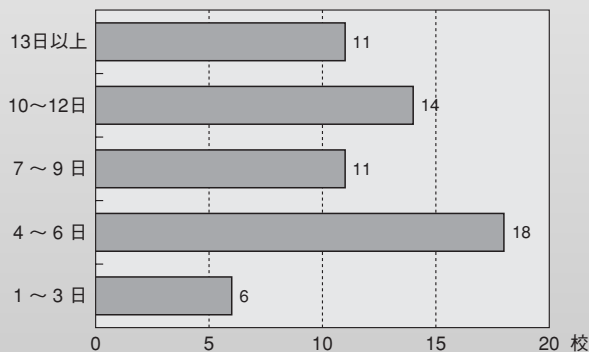
また、教育ボランティアを、授業や特活の指導、調査の引率、不審者対応のための警備等で、積極的に招いている学校も多い。地域の人々の専門的な知識や支援により、子供たちの学習への興味・関心を高め、追究の深まりに役立てている。

さらに、各校では、地域行事、祭礼、スポーツ大会等に子供たちの参加を促し、学校では学習できない体験活動を通して、生きる力を培おうとしている。

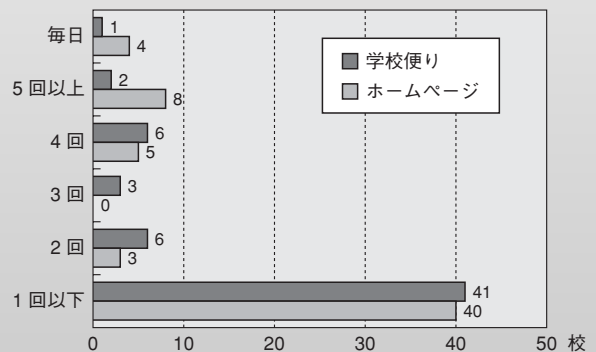
家庭、地域、学校が、よりよきパートナーとして、連携を深めつつある。三者がそれぞれの良さを発揮して、子供たちを育てていくことが期待される。

情報の発信

● 1年間の授業公開日 ●



● 学校便りの発行とホームページの更新（1か月） ●



（市内小中学校60校にアンケート調査）



学校に招いて

▲ ボランティアによる読み聞かせ (六ッ美中部小)

▲ 専門の技を伝授する部活動指導 (六ッ美中)



地域の力を借りて

▲ 毎日見回るPTA警備ボランティア (岩津小)

▲ 学校評価に役立てる評議員会 (北中)



地域へ出かけて

▲ 地域行事「村積山登山」にこぞって参加 (奥殿小)

▲ 学校と地域が共催する「悠紀ほのぼのウォーク」 (六ッ美南部小)

お知らせ

●教育最新情報

○地域の教育力を生かした授業
 地域に開かれた「特色ある学校」が、今、求められている。地域の方々との積極的な連携で、効果をあげている中学校の実践例を紹介する。

「文化講座」 竜海中学校

本校では、平成八年度より文化祭の中で「文化講座」を開設し、全校生徒が取り組んでいる。

この「文化講座」は、日々の授業ではなかなか学ぶことのできない日本の文化や地域の伝統に触れたり、体験的な活動を通して生徒の文化的な資質を高めたりすることをねらいとしている。そこで、地域（岡崎市）の中から多くの外部講師を招いて実施している。



昨年度の開設講座は次のとおりである。
 （抜粋）

一	君も今日からマジシャン
二	点字を使って文章を書こう
三	手話に挑戦しよう
四	車椅子を体験してみよう
五	籐細工で籠を作ろう
六	英会話で外国を知ろう
七	琴の調べに挑戦しよう
八	いろいろおもしろ実験
九	昔の遊び道具をつくろう
十	お茶をたしなもう
十一	チーズパンに挑戦

日本文化を学ぶものから、趣味・特技を活かすもの、国際理解、福祉ボランティアなど、その内容は多岐にわたっている。講座に参加した生徒は、次のような感想を寄せている。



▲ 琴の調べに挑戦しよう

わたしが選んだ講座は「英会話で外国を知ろう」でした。

教室には、フィリピン出身の女性の方が来られました。フィリピンの「気候」や「学校の様子」などを聞きました。おかげで日本以外の国のことがよく分かりました。

これからもっといろいろな国のことを知りたいと思います。

これ以外にも「もつと時間がほしい」「将来ボランティアをやってみようと思う」といった前向きな感想が多くあった。



▲ 籐細工で籠を作ろう

講座開設希望調査から一部講師の依頼まで、生徒の自主的な取組に支えられている活動でもある。生徒の興味・関心を大事にしつつ、さらに充実した「文化講座」を目指し、今後も努力を続けていきたい。

● 県外研修報告

常磐中 畔柳 朋典

昨今、岡崎市でも小中連携教育が盛んになってきた。今回、私たちは研究先進校の茨城県日立市立多賀中学校を視察した。当校は、隣接する油繩子（ゆなご）小学校と共同で市教育委員会指定の小中連携教育を、平成十二・十三年度にわたり研究してきた。

当日、両校の研究主任から異年齢交流の在り方について話を伺った。「生きる力の育成をめざした小中連携の在り方」というテーマで各教科、領域、行事等広い範囲にわたって試行錯誤し、その中からある程度効果が見えてきたのは次のことである。

一、異校種間T・T

中学校教諭が小学校の教室で授業をすること。これは小学校教諭の専門性を高めることができた。

二、行事での試み

小学校音楽会、陸上競技会などで指導者不足を解消することができた。

●親善訪問使節団の派遣

ニューポートビーチ市への中学生親善訪問は、今年で二十一回目となる。七月に訪れた当市の生徒宅へのホームステイや現地の学校訪問を通して、交流を深めてきた。

- 〈生徒〉城北中 角谷 敏克
六ツ美中 樋口 恵子
矢北中 伊奈 綾香
新香山中 松藤 卓
〈団長〉葵 中 澤 博史
〈副団長〉南 中 長坂麻奈美

●表彰

◆平成十四年度学校関係緑化コンクール

●学校環境緑化コンクール
入選(愛知県緑化推進委員会賞)
岡崎小学校

●学校林等活動コンクール
入選(愛知県教育委員会賞)
秦梨小学校

◆岡崎市明るい選挙啓発ポスター(特選のみ)

- 広幡小 五年 松原 央幸
細川小 六年 中桐 卓大
大門小 六年 浅井 柚香
葵 中 三年 猪飼美穂子



葵 中 三年 深見麻里恵
葵 中 三年 宮嶋 和宏

◆愛知県合唱コンクール

●同声の部

金賞 南 中学校
銀賞 六ツ美北中学校
銀賞 矢作北中学校

◆NHK全国学校音楽コンクール(愛知県コンクール)

●中学校の部
銅賞 南 中学校

◆平成十四年度愛知県小学校バンドフェスティバル(県大会)

優秀賞 竜美丘小学校

◆平成十四年度愛知県吹奏楽コンクール(県大会)

●中学校の部
大編成

◆第35回岡崎市中学校新人体育大会・水泳競技の部

★新記録

Table with columns: 性, 種目, 氏名, 校名, 記録. Lists swimming results for boys and girls across various events like 50m, 100m, 200m, 400m, and relays.

金賞(東海大会) 竜海中学校
銀賞 甲山中学校
●中学校の部 小編成
●小学校 矢作南小学校

◆第三十八回西三河総合バレーボール選手権大会(県大会出場のみ)

●中学校の部 大編成
●小学校 矢作南小学校

◆第四十五回中部日本吹奏楽コンクール(県大会)

●中学校の部 女子優勝
●小学校 奥殿小学校

●中学校の部 男子優勝
●小学校 六南小クラブ

●中学校の部 女子優勝
●小学校 上地小学校

●中学校の部 男子優勝
●小学校 六南小クラブ

●中学校の部 女子優勝
●小学校 六南小クラブ

三、特別活動での指導

身近な「ごみ問題」での追究学習では、高校やPTA、さらに日立の工場関係者まで取り込んだ共同清掃という形に発展した。

四、学習のしつけ

小中一貫した学習のしつけをある程度考え共有していくことで、中学校の「壁」を取り去る効果があった。これは不登校生徒を減少させる効果があった。

その他文面に書き表し切れない成果も聞き取ることができた。

今後、岡崎市でも連携方法についてさらに研究を深めたいところである。



▲多賀高校前の呼びかけ運動

・カ
ツ
ト
六ッ美北中 山田泉美



人形送別会 (昭和2年)

アメリカへ贈られる人形の送別会の一コマである。同じ年の三月にアメリカから、日米友好の印として青い目の人形が、市内六校に贈られた。背景の日本人形はそのお返しであろう。

アメリカの少女と握手をする女の子。握手というあいさつが珍しかったのだろう、女の子の表情に緊張感が漂っている。足元を見ると、女の子がタイツだけなのに対して、アメリカの少女は靴をはいている。生活習慣の違いがよく分かる。

青い目の人形は、日米友好の証として各校で大切にされたが、太平洋戦争が始まってほとんどが廃棄された。広幡小の人形も残念ながら残されていない。



写真提供 広幡小学校



- * 運命の足音 五木 寛之 ¥1429
幻冬舎
- * わが屍は野に捨てよ 佐江 衆一 ¥1500
新潮社
- * てるてる坊主の照子さん上・下 なかにし礼 各¥1600
新潮社
- * 新一日一言 佐藤 毅 ¥1600
河出書房新社

* 青空の音を聞いた 團 伊玖磨 ¥2500
日本経済新聞社

今年は、作曲家・團伊玖磨の一周忌。氏の仕事場は八丈島であった。いっばいに広がる雄大な青い空と海に対峙することで、世事を忘れ、澄んだ心で作曲ができたであろう。

今の日本を見つめて「日本の音楽」を創り続けたということなど、興味のある音楽家人生が、随筆の達人ともいわれる文章で語られている。「音楽はなくても生きられるが、心のゆとりや美への指向のない生活は、けだもののそれに似ていく」という。終章が語る、この警告の持つ意味は重い。

お年寄りを講師に招いての梅干作り。食べ物に感謝する生活科の授業。梅の収穫から、シンでもみ、漬け込むまでの全工程を一緒に行う。できあがった梅干は、給食のときに食べる。異世代との交流に講師も満面の笑顔。地域に開かれた学校への取組を、一層大切にしたい。

修学旅行を間近に控えた六年生。調べ学習を進めている学級も多いことであろう。教室で学んだことを、

シオ スア

実際に自分の肌で直に確かめる絶好の機会である。歴史の息吹に触れる古寺の見学、級友と存分に楽しむバスのレク。修学旅行が、六年間で最高の思い出になることを願う。

愛嬌ある表情でだっこを求める子。それを笑顔で受け止める中学生。そばには見守る施設職員と教師の姿がある。

この日のために、教師は夏休みから三度足を運んだ。受け入れ側との十分な連携があるからこそ、子供たちは自信を持ってボランティア体験ができる。

ススキの広がる河原に自転車を倒し、赤とんぼを追いかける親子を見た。夕日に照らされた銀色の穂先が波打つ。その光景に子供が声をあげ、父親はうなずいた。

晩秋の風にも心が温かかったのは、オレンジ色の夕日のせいだけではない。